東京都江戸東京博物館紀要　第１号　2011年３月
Bulletin of the Edo-Tokyo Museum, No. 1, P. 183－198, March, 2011

【調査・事業報告】

野外博物館スカンセンでの研修報告

早　川　典　子*

目　次

はじめに
1．スカンセン概要
2．スカンセンの組織
3．スカンセンの財政について
4．イベント部門について
5．文化歴史部門（教育普及課）について
6．文化歴史部門（衣服課）について
7．文化歴史部門（建物課）について
8．建造物部門について
9．スカンセンの動物園について
10．野外博物館とは何か
おわりに

キーワード　野外博物館　教育普及　博物館経営　動物園　財政　移築復元　展示方法

はじめに

Skansen（以下、スカンセンと記す）は、1891年に開園した世界最古の野外博物館といわれる施設である。スカンセンの歴史や日本との関わりにおいては、日本での既存研究も多い。

古くは、今和次郎が戦前にスカンセンを訪れ、雑誌『国際建築』（1934年（昭和９年）６月号）に見学記を寄せている。また藤島亥治郎も戦前、雑誌『住宅』において、ヨーロッパの民家の見学記を連載し、スカンセンについても触れている。（この連載は1949年（昭和24年）に『欧州の民家』という１冊にまとめられ養徳社から出版されている。）

近年では、国立民俗学博物館に在籍されていた杉本尚次が世界各地の野外博物館に関する著作を書かれており、長年の研究成果を『世界の野外博物館』（2000年（平成12年）学芸出版社）というわかりやすい一冊にまとめられている。

わたしは江戸東京たてもの園で働く者として、一度スカンセンで研修をしたいという思いをずっと抱

*東京都江戸東京博物館学芸員

いており、平成22年度の美術館連絡協議会による「海外研修派遣」制度からの助成をいただき、平成22年７月下旬から５週間にわたってスカンセンにて研修をさせていただく機会を得た。この研修では、スカンセン館長Mr. John Brattmyhrをはじめ、館長秘書のMs. Cecilia Urwitzがご尽力くださり、スカンセンのいくつかの部署で勉強させていただくことができた。

スカンセンの歴史をはじめとする、世界の野外博物館史や、欧米の野外博物館を誰がどのように日本に紹介したか、という既存研究はすでにたくさんある。しかし「野外博物館の運営実態」という観点から、スカンセンを紹介しているものはあまり多くない。この稿では、現在スカンセンで働くスタッフからのお話を中心に、スカンセンを紹介する。

１．スカンセン概要

スカンセンは2011年には開園120年を迎えた。1891年、民俗学者ハーツェリウスが近代化する以前の伝統的なスウェーデンの生活の保存を国王に進言。王室の土地であったユールゴーデン島を一般市民に開放して創設された。

スカンセンは、ストックホルム中央駅近くから、トラムに乗って約20分。交通の便がよく、周辺には、美術館、博物館、水族館、遊園地などがあり、市民や観光客から人気のあるエリアである。特にスカンセンの向かいには、「グルナ・ルンド」という大きな遊園地があり、ファミリーや若者に人気。ここは海沿いに作られたジェットコースターや100メートル以上の高さから落下するシューターが目玉。夏場はスカンセンをしのぐ人気スポットとなっている。

スウェーデンは、緯度が高いので、夏至の頃は午前３時ごろから午後11時ごろまで明るい。反対に、冬至の頃は、午前９時ころから午後２時ごろまでの非常に短い日照時間である。スカンセンの開園時間は、これに合わせて、夏季は午前10時から午後10時まで、冬季は午前10時から午後４時までと、時期によって細かく設定されている。そして入園料は、来園者が多い夏季は、大人100kr（スウェーデンクローネ　約1200円）子ども50kr（約600円）、冬季は、大人70kr、子ども30krとなっている。決まった休園日はクリスマスイブ（12月24日）しか設けられておらず、それ以外は毎日開園している。（施設内のメンテナンスは開園時間中に行っている）

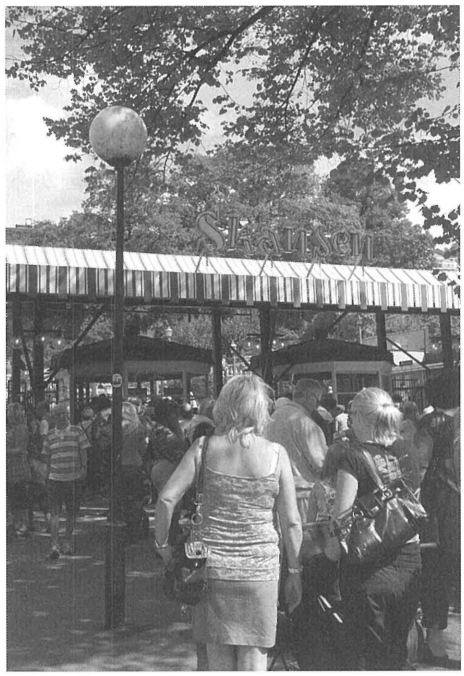
年間入場者は、2008年は140万人、2009年は150万人。2009年は1993年以降最大の入場者だった。2008年に実施されたスカンセンでの来園者アンケート結果によると、スカンセンを訪問する外国人観光客の75%は、建物を見に来ているが、スウェーデンの市民は、園内の動物を見に来ている。

スカンセンにある160棟の建物は、毎日すべて公開しているわけではない。１日あたり最低で35棟の建物、多いときでも40棟の建物が公開されている。どの建物を公開するかどうかは、各建物に常駐する職員（詳細は後述）の勤務状況による。

園内は、架空のまちなみを復元しているエリア、農村の環境を再現しているエリア、動物園、子どものための遊園地などに分けられ、またストックホルム市内を一望できる高台には大きなステージがあり、大規模なイベントはここで開催される。

スカンセンのような博物館のことをスウェーデン語では、「Frilufts museum」という。英語では「Open air museum」という言葉を充てる。日本で使用する「野外博物館」という言葉は「Open air museum」の訳語であると理解されることが多い。

スカンセンは、日本では「移築した建物を収集、展示する博物館である」という視点で紹介されることが多いが、「Open air museum」とは、建物だけを展示の対象としている施設ではないことがよくわかる。スカンセンは1700年代から、1940年代までの建物約160棟が展示される博物館であるが、実際に足を踏み入れると庭園、動物、植物、乗り物、食べ物、伝統的な舞踊や音楽、技術、工芸さまざまな要素が総合的に展示されている。



【写真１】 来園者でにぎわうスカンセンのエントランス

２．スカンセンの組織

スカンセンは、財団によって運営されている。スカンセン財団の理事は７人、財団の職員は、195人の正規職員と、300人の季節雇用職員（夏季のみ）。部署は11部門に分かれている。（2010年現在）

・首脳部（主要な仕事は協賛資金集め）
・人事部（財団内の人事）
・会計部（契約事務）
・普及部（マーケティング、プレス対応、ウェブサイトの運営）
・販売部（スカンセンショップや、クリスマスマーケットの担当）
・公園・庭園部（スカンセン内の植栽や自然の維持管理全般）
・安全部（施設内の安全に関すること全般）
・動物園部（スカンセンの動物園部門のすべてを担当。スウェーデンの動物全般の調査）
・イベント部（年中行事の再現イベントや、園内のアクティビティ開発、音楽やダンスや演劇）
・文化歴史部（内部展示、教育普及や、維持管理、環境調査）
・建造物部（スカンセンの建造物、設備、館内システムに関する計画、建設、保存、維持管理）

スカンセンでは、毎年「Annual report and Financial statement」という年報を発行しており、この中では、館長の所信表明、年間の来館者状況をはじめ、組織ごとの業務の内容、スカンセンの使命、将来の展望、財務諸表、協賛企業の紹介などが掲載されている。

３．スカンセンの財政について

話者：Mr. John Brattmyhr（館長：Director）

スカンセン財団が受けている国からの補助金は、全体の収入のうちの35％から40％である。これは他の博物館施設と比較すると格段に少ない。一例を挙げると、スカンセンに隣接している北方文化博物館の補助金は70％である。資料として、スカンセン財団の財務諸表を添付する。

現在のスカンセン館長　Mr. John Brattmyhrは、就任５年目。館長が就任する以前のスカンセンの収入は、200万クローネだったが、自分が就任したあとは、3000万クローネになった。収入は、入場料収入だけでなく、スポンサー収入が大きい。館長の主な仕事は、スポンサーを探すことであると自負している。館長の任期は、定められておらず、「クビになったら、そのあと一年間は給料を保証する」という契約である。

【表１】 Statement of profit and loss（損益計算書）

単位：千スウェーデンクローネ

	2009	2008	2007
□収入			
国（文化庁）からの補助金	69502	58425	58320
入場料収入	77645	68977	63675
園内での各種催し物による収入	7914	8221	7007
売店での売上金（くじの売上含む）	16060	15008	15115
家賃収入	7549	7050	6793
その他収入（スポンサーからの寄付など）	13377	18654	16571
小　計	192046	176335	167481
■支出			
活動費	70565	64350	60281
人件費	104644	100171	100444
減価償却費	3000	7282	2052
その他	0	0	24
小　計	178209	171803	162801
営業利益	13837	4532	4728
営業外損益			
受取利息	559	1372	1057
有価証券評価益	882	0	32
有価証券評価損	0	▲2844	0
有価証券売却損益	134	▲92	723
支払利息	▲2	▲2	▲4
小　計	1573	▲1566	1808
経常利益	15410	2966	6536

※本表作成にあたり、当館管理課経理係谷川真実子氏の協力を得た。

４．イベント部門について

話者：Mr. Urban Wallin（イベント部門チーフ：Program Chef）

この部署の仕事は、スカンセンの中で行われる催し物の企画と運営。大きなコンサートから、季節ごとの伝統行事（夏至祭、クリスマス、大晦日）大小合わせて2000種類ものプログラムを提供。イベント部門には、５人のプロデューサーの下で数人の職員が所属している。この中には、教会のオルガニストや、照明の技術者等も含まれる。

【表２】 Balance sheet（貸借対照表）

単位：千スウェーデンクローネ

	2009	2008	2007
□資産			
建物	17070	8154	8123
新規建造中建物	350	4213	1939
什器備品、車両、機器、動物	8341	8597	4045
有価証券	8936	7484	10181
固定資産小計	34697	28448	24288
商品在庫	4851	4715	5392
売掛金他	3074	3759	2316
その他債権	184	886	409
前払金	4463	5616	7156
短期貸付金	5000	0	5000
現金、預金	39409	24805	23612
流動資産小計	56981	39781	43885
資産合計	91678	68229	68172
○資本			
資本金	4600	4600	4600
資本準備金	48320	33017	30722
資本剰余／欠損金	▲15047	▲2711	▲6953
当期繰越利益	15410	2966	6536
資本合計	53283	37872	34905
営業利益	13837	4532	4728
積立金	1655	1971	2398
■負債			
買付未払金	9341	10001	8580
その他未払金	3259	1669	1713
前受金	24140	16716	20576
負債合計	36740	28386	30869
資本・積立金・負債合計	91678	68229	68172

※本表作成にあたり、当館管理課経理係谷川真実子氏の協力を得た。

スカンセンで開催されるイベントは、スウェーデンの中でも特に品質が良くなくてはいけない。われわれは、文化、芸術、伝統、歴史などへの造形が深くなければいけないし、その他にも絶滅が危惧される植物や、動物にも関心がなければいけない。また、夏至祭や収穫祭などのスウェーデンの伝統行事にも精通している。対象は、大人だけでなく、子どものためのダンスや遊び、音楽についてのプログラムも数多く企画している。もちろん、これらのすべてを内部ではできないので、外部からの企画を買うこともある。

７月下旬から８月にかけての毎週火曜日に行われる音楽コンサート「アラソング・スカンセン」は、75年も続いている歴史あるイベントであり、スウェーデン国営放送で生中継される。参加者が一晩で２万人も集まることもある。

イベント中の事故への対策は万全を期している。柵をつけたり、あるいは警備員を配置するなど。数年前に、大晦日のイベント時に、来園者が階段から滑って落ちたという事故があったが、スカンセンでは今までに死亡事故は一度もない。

多数の来園者がある大規模なイベント開催のときは、さまざまな年齢層や持病を持った人の来園も考慮して、医者が常駐している。大晦日には、花火が打ち上げられるが、これはとても怖い。火災には特に注意を払っている。

このようなイベントは、一回きりではなくて毎年開催し続けることが理想的である。スカンセンには、イベントのための潤沢な予算があり、いろんなことができる場所である。これから音楽のコンサートをもっとたくさんやりたいし、子どものためのプログラムをもっと充実させたい。そしてイベント開催にあたって広報費は非常に重要である。今でもかなりかけているが、自分は、もっとあって構わないと思っている。（研修期間中、スウェーデンの新聞を毎日２紙チェックしていたが、スカンセンのイベントに関する新聞広告は、毎週掲載されていた。また地下鉄の車内広告でも、スカンセンをはじめとする博物館施設の広告をよく見かけた。）

【写真２】 伝統舞踊イベントのようす

５．文化歴史部門（教育普及課）について

話者：Ms. Anna-Vera Nylund（エデュケーター：Education officer）

文化歴史部門には、教育課、衣服課、建物課の３つの課があり、45人が所属。夏期には30人が増員される。

教育普及課は、一般見学者の教育普及に関する係と、学校連携係の２つに分かれている。（Ms. Annnaはこちらに所属）

年間に700もの団体からの見学申し込みがあるが、そのうちの70％が学校団体からの申し込みである。子どもの来園者のうち、全体の14％がこのような事前予約に含まれる。子どもの来園者の年齢層は、全体では７歳から10歳が一番多く、小学校の団体見学はこの年齢で行われることが多いことがわかる。親に連れられてくる子どもは６歳以下が多い。

スクールプログラムの実例を挙げると、古い教室を使って、昔の小学校の授業を体験させることや、洗濯板を使った洗濯体験、動物とのふれあいなどがある。小学校の授業ではできない内容を、スカンセンで体験してもらうことが大切である。

この課で必要な専門性は、民俗学、建築学、教育学、芸術学など多岐にわたる。

スカンセンの建物の中で、当時の衣服を着てガイド、監視に従事する職員は、「Museivärd」と呼ばれている。（日本語に直訳すると「博物館の先生」という意味。）英語では、Museum teacherもしくは、Interpretator 、Museum hostという言葉を充てる。この職員は、大学生、高齢者によるアルバイトスタッフも多い。スカンセンの職員の夏季休暇は７週間あり、職員は交代で休暇を取得する。（スウェーデンの法律では、法定の夏季休暇は５週間）他の仕事をしている人が、自分の夏季休暇を利用して、夏の間だけこの仕事をすることもよくある。

このアルバイトに採用されるための条件は以下のとおりである。

(1) 大学において、民俗学、建築学、教育学、芸術学などの30単位を取得していること。（実際はすでに大学は卒業している人が多い。）

(2) 最低でも英語ができること。その他の言語ができる人は採用されやすい。

(3) 大工仕事や、民族衣装に関する知識、織物や染織についての興味を持っている人は、採用されや

【写真３】 むかしの洗濯体験

【写真４】 洗濯石けんも手づくり

【写真５】 洗濯した衣類を干しているようす

すい。

(4) 社会におけるコミュニケーションのスキルが高いこと。

(5) 採用後は、全体の社内研修を受ける。接遇研修など２日間。その後、教育普及部門の研修を２日間受ける。スタッフ用の分厚い研修マニュアルが整備されている。

（参考）

実際に建物の中で働いている「Museivärd」への聞き取り

・この仕事でもらっている給料は１時間あたり107kr（賃金が安い業種であるレストランなどは平均90krくらいだという）実際の手取り額は税金を引かれた額である。

・自分は、民族衣装や服装についての専門学校にて先生をしている。学校の夏休みを利用して、夏季だけここで働いている。建物の中でやっている仕事は、展示物の監視やケア、窓の開け閉め、ガイド、軽微な清掃などを含む。

・建物の専門的な清掃は、週に１回程度、専門のスタッフが入ることになっている。

・基本的には、研修を受けた建物のみに入ることになっているが、他の建物の中に入りたい場合は、別途、その建物についての研修を受けると入ることができる。

【写真６】 領主の館の中にいる「Museivärd」

６．文化歴史部門（衣服課）について

話者：Ms. Nina Soderblom（衣装デザイナー：Designer）

衣服課は160棟の建物の中で働く「Museivärd」の衣服を製作、管理する部署。職員は12人。３つの係に分かれている

(1) 衣装係　この家にはどんな衣服が必要かを調査する

(2) アトリエ（裁縫室）係　衣服の修理やオリジナルの衣装の複製製作を行う

(3) テキスタイル係　使用した衣服の洗濯やアイロンがけを行う（アイロンがけは１日1000枚になることもある）

この部署では、洋裁の能力、デザイン力などを持つ人が働いている。衣服の製作はミシンなどの機械を使わずにすべて手作業で行う。衣服だけではなく、建物のカーテンやクッションなどは、この課に含まれる。

アトリエ（裁縫室）では、スカンセンの中で着るための衣服を製作している。1700年代の衣服は、絵画などから復元することが多い。1800年代後半以降、写真がある時代には、写真を参考にしながら復元する。1930年代の衣服は、オリジナルがたくさんあるので、オリジナルを着ていることが多い。１つの

家に働く「Museivärd」は、何人もいるので、あらかじめいろいろなサイズの服を用意している。

「Museivärd」は、衣服のボタンが取れたり、破れたりしたら、着ている人がすぐに自己申告することになっている。洗濯のタイミングも、着用した人からの申告による。勝手に持ち帰ったり、自分で洗ったりしてはいけない。

現在スカンセンで展示している「家」で使用する衣服は、収蔵庫にすべて網羅されている。衣装係では、いろいろな時代の古い絵画、現物、写真等を多角的に調査しながら、スウェーデンの衣服についての研究を進めている。

例えば、1800年代の住宅を復元していても、内部の展示は、1920年代の家具調度品となっている住宅がある。その場合は、もちろん1920年代の衣服を着た「Museivärd」がその家の中にいることになる。

園内には1940年後半（第二次世界大戦後）の家庭菜園の展示があるが、そこが一番新しい時代の衣服を着ている。スカンセンでの衣服の収集対象は、現在は、1980年代までを下限としている。

アトリエでの製作以外の衣服の収集方法として、時代によっては、市民からの寄贈が多い。また一般のオークションで手に入れることもある。すでに持っている衣服の手直しをしたりしながら使っているが、比較的新しい時代のものは、買った方が安い場合も多い。

【写真７】 アトリエで製作中の婚礼衣装

スカンセン衣服課における衣服の分類基準は、以下の通り

(1) 1700年代から1980年代まで10年単位での分類

(2) スウェーデン全土の地方ごと

(3) 社会の階層（貴族、富裕、庶民など）

(4) 大人、子ども

スウェーデンにおける民族衣装の歴史は、教会に行くときや、夏至祭、聖ルシア祭（冬至祭）など伝統行事の「ハレ」の場に着用するものであった。しかし、1900年ごろになると、近代化が進み、民族衣装を着る風習自体が薄れてきてしまった。民族衣装の現物の残り具合を見ると、その頃に近代化が進んでいったことがよくわかる。スカンセンの設立年代は、1891年であるので、創設者ハーツェリウスがスカンセンを創設した時代にスウェーデンの近代化がかなり進んだことが想像できる。

【写真８】 衣装収蔵庫内部のようす

現在では、スウェーデンの国民が自分の家に伝わる民族衣

装を着用して、スカンセンでの伝統行事に参加することができるようになっており、そういう場所としてスカンセンが機能しているのは、すばらしいことである。

７．文化歴史部門（建物課）について

話者：Mr. Johan Schuisky（アシスタントキュレーター：Assistent Curator）

この課では８人ほどが働いている。実際に傷んだ建物を直すことができる技術者と、歴史ある建物に住んでいる市民向けに古い家を維持する講習会を担当する職員。建物の中に展示している家具の収集担当者と、そのアシスタント。壊れた家具を修理する家具職人、これらの展示品をコンピューターのシステムに登録するレジストラーが１人。

コンピューターシステムを最近取り替えたため、そのシステムを管理する人が１人。

室内の写真を撮ったりするカメラマンが１人。（この職員は正社員ではない）

１～２年後には、スカンセンのウェブサイト上にて、所蔵している家具等の検索システムを設置し展示品（スウェーデン語FÖREMÅL　英語Object）の写真を公開する予定なので、現在、いろいろな写真データを整理しているところである。

スカンセンでは、建物の中にある家具の取り扱いは、本物も複製も区別がない。家具を保存することを目的で収集しているわけではなく、建物の中で使用することを目的で集めている。

建物の保存と活用のバランスについては、例えば、小学校の建物の中でイベントをしたいとき、価値のある家具や、展示品がすでに置いてあるので、それをどう移動するか、参加者の避難経路をどうするか、万一事故が起きた場合は、どうするのか、それらの打診は、すべてこの部署に回ってくる。

全ての建物の扱いは、等しいわけではない。例えば小作人の家は、毎日のように内部を公開し、たくさんの来園者を中に入れることができるが、これは1920年代に建てられた家なので、比較的丈夫に建てられているし、傷んだ場合も、手に入りやすい材料で修復をすることができる。

しかし、1700年代、1800年代の建物は、壊れやすいし、修復の材料も手に入れにくいので、より大切に使わなければならない。

スカンセンには、1700年代から、1940年代までの建物が展示されている。1940年代以降、現在までの展示がないので、そのあとの展示をどうするのか、という議論は内部でもよくしている。既に建っている建物を壊して、別のもっと新しい時代の建物を建て替えるようなことがあってもいいのではないか？という話もしているところである。スカンセンに来園する人は、古いものに興味がある人ばかりではなく、現在に近い展示も見てみたいと思っているのではないかと考えている。

【写真９】　文化歴史部門の事務室は1803年に建てられたハーツェリウスの生家の中にある

スカンセンでも、展示品の盗難や破損は、最近は増えてきている。昨年とうとう一部の建物の中に防犯カメラを取り付けることになった。価値のあるアンティークは、展示品としては出さずに、複製品を置くようにしている。

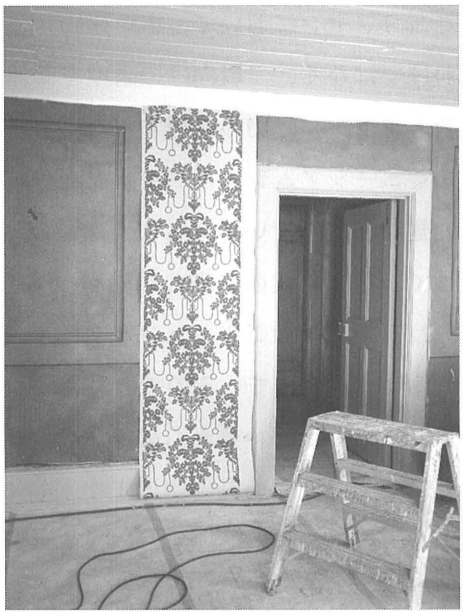
この建物をスカンセンで保存して欲しいという寄贈の連絡は、毎日のように来る。

スカンセンの趣旨に合っているかどうかを職員が判断する。

【写真10】 1700年代に建てられた印刷屋の建物を1840年ごろの内部展示にリニューアル工事をしているようす

写真10は、1700年代に建てられた印刷屋の建物。

一年後をめどに公開する予定。1840年は、スウェーデンにおいて印刷技術ができた年であり、魅力ある展示にするために、このような内部展示の年代替えを行うことになった。



【写真11】 1840年ごろに使われていた絵柄の壁紙に張替え作業中

8．建造物部門について

話者：Mr. Martin Wulff

（建造物部長：Director of Construction and Maintenance 建築家：Arkitect Sar）

建造物部門の係は以下のとおり。

(1) 計画係　建築家が園内のすべての施設の図面を引く

(2) 建造物係　大工、職人、レンガ、タイルに関すること

(3) 設備係　電気、換気、水、暖房に関すること

(4) 清掃係　皮や金属など様々な素材ごとの清掃業務

(5) 輸送係　工事資材の輸送などに関すること

(6) ペンキ係（２の建造物部門の一部門であるが独立）

各係のチーフが月に１回集まって、必ずミーティングを行って、建物の保全に関する小さな問題から、大きな問題までをみんなが共有化している。

スカンセンでの建物の復元計画のときに、一番頭を悩ませるのが、建物の暖房設備である。新しい技術を古い家に導入するのはとても難しい。1930年代に移築したときに暖房設備を入れて、そのまま80年間使っている住宅もある。暖房システムを見せないための努力は、いろいろ行われている。茅葺き屋根の裏側に暖房システムを入れた事例などもある。

スカンセン設立当初は、元の建物に大きく手を入れて、意図的に規模を縮小したり、内部を改築した

りすることは、よく行われていたようである。しかし、現在はこういうやり方はやらない。移築の方法自体も、様々な事例のデータがすでにあり、どうやったら、より環境全体の再現性が高くなるのか、というノウハウが蓄積されている。

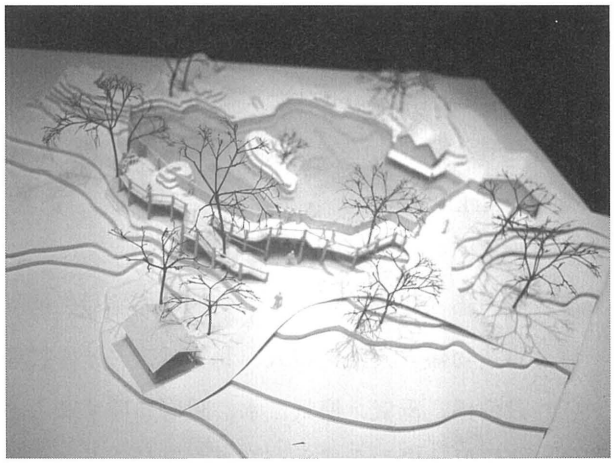
建物の活用でいえることは、建物の中に多くの人が入ると、確実に建物が傷む。自分は、できるだけ昔の状態のままで、後世に残していきたいと考えているので、例えば、住宅の中に多くの来園者を入れる事業などは、あまり良いと思わない。特に住宅は、住宅に適正な人数だけを入れて管理していくような見せ方をしたい。

しかし、最終的な決定を下すのは館長であるので、集客との関係で、館長が建物の利用を決断するのであればそれには従う。

移築された建物でありながら、レストランとして使用している建物の保全の問題は、大変頭を悩ませている。換気、熱源、電気、給排水、暖房、どの設備に関しても大変である。復元された建物だけでなく、職員用の事務室や、店舗など、園のすべての建築をこの部署で管理している。

スカンセンにおいて、古い建物を使いながら維持管理をしていくノウハウは、ここだけに留めておくわけではなく、一般向けの講座を開催することによって、市民に対してフィードバックしている。またスカンセンの建物の修理するために新たに製作した建築金物類（ドアノブ、蝶番など）は、スカンセンのミュージアムショップで販売も行っている。スウェーデンには、スカンセンと同じくらいの年代の古い建物に住んでいる人もまだまだたくさんいるので、古い年代の修理の部品やペンキなどの塗料は、スカンセンのミュージアムショップで買えるようになっているのである。

2011年には、企業からの協賛金によって、スカンセンの新しい動物園の工事が始まる予定である。この新しい動物園「リル・スカンセン」（小さなスカンセンの意味）の設計業務はすべてこの部署で行っている。12000m²のかなり大きい展示施設である。

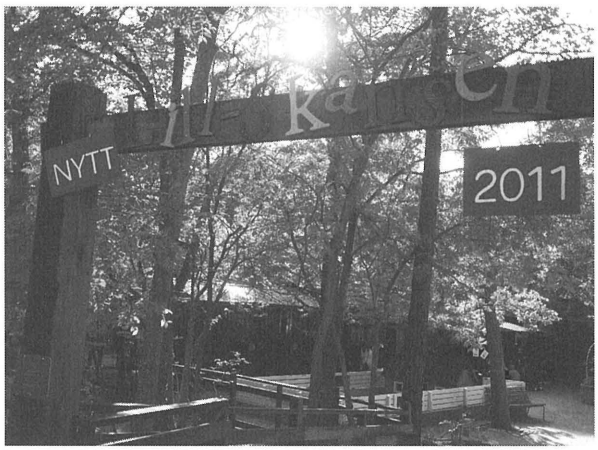


【写真12】 計画中のリルスカンセン建築模型

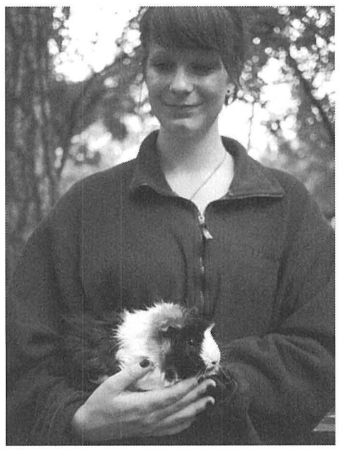
9．スカンセンの動物園について

スカンセンでは、設立当初から移築した農家の庭先に動物がいる、という展示形態をとっていた。農家で飼われていた動物が集められ、鶏、豚、アヒル、ガチョウ、牛、馬、羊、山羊などの在来種の家畜の保護、保存、そして、スカンジナビアに棲息する狼、オオヤマネコ、アナグマ、ヒグマ、大鹿、フクロウ、ヨーロピアンバイソン、トナカイなど、もともとこの地域に棲息していた動物の保護にも取り組んでいる。

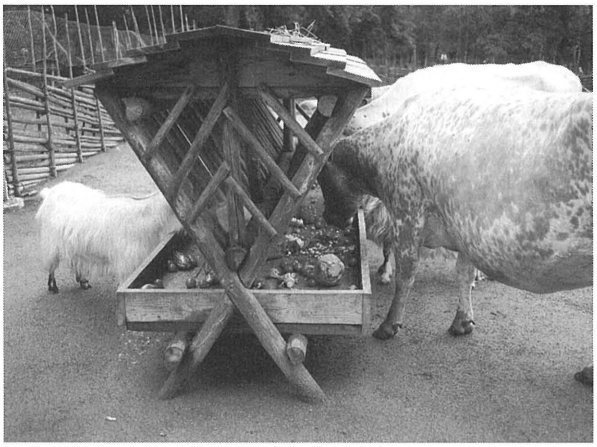
スカンセンの設立当初のプランでは、住宅エリアと動物ゾーンは分離されていなかった。1940年代に、



【写真13】 現在のリルスカンセンのエントランス



【写真14】 動物ふれあい体験のスタッフ



【写真15】 農場の柵の中の動物のようす

【写真16】 動物に餌を与える準備をしているようす

住宅エリアと動物ゾーンを分離し、街並みを再現しているゾーン、農場の再現ゾーン、動物園部分が分離されて、現在のスカンセンのマスタープランの基となった。

ストックホルム市内には、動物園と呼ばれる施設はスカンセンしかないので、家族連れでにぎわう。

また、スカンセン水族館では、くもやこうもり、熱帯の魚など、スウェーデン以外の動植物も展示されている。実際に爬虫類に触るコーナーなどもある。見学には別料金が必要である。

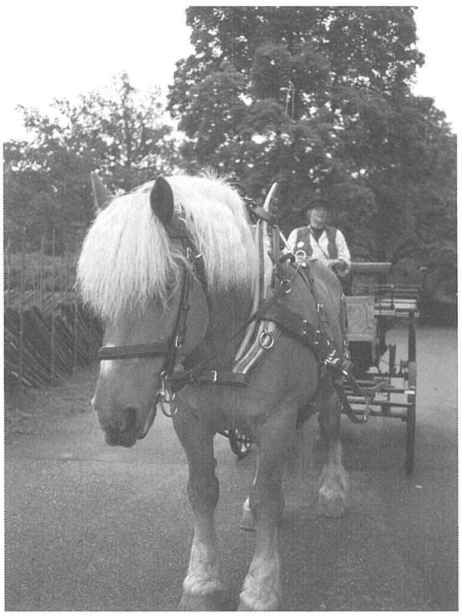
10. 野外博物館とは何か

わたし自身、日本国内の野外博物館施設にはかなり足を運んだつもりであったが、スカンセンを訪問して「Open air museum」とはこういうものなのか、という思いを目の当たりにした。

日本におけるスカンセンの紹介のされ方は、木造建築を移築、収集した建築の野外博物館である、という場合が多かった。戦前から、スカンセンを訪問し、紹介しているのは、建築関係者が多いこともその一因であると思われる。

来園者から話を聞くと、スウェーデンの人にとっては、スカンセンとは動物園と認識している人が多

【写真17】 エントランスから高台に上がるケーブルカー運行のようす

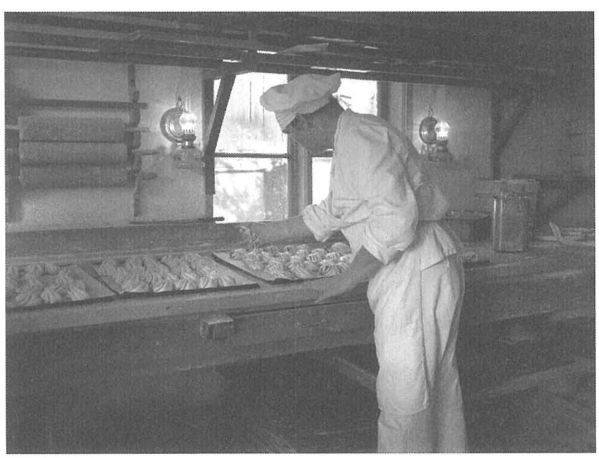


【写真18】 馬車の周遊は来園者から大人気

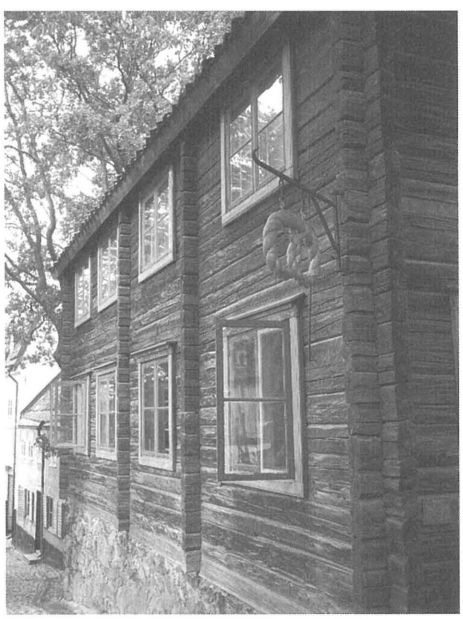
いことも驚きであった。

またストックホルム市内で一番古いケーブルカーが運行され、園内を周遊する観光的な要素の強い小型の電車や、のんびりした馬車が走っている。またポニーの乗馬体験もできる。古いものから、新しいものまで、体験できる乗り物の種類も豊富である。（そもそもストックホルム市内は、観光用の馬車や、王室の衛兵の交代のための騎馬隊が日常的に走り、同時に公道を近未来の乗り物といわれるセグウェイが走る都市である。）

そして、園内には、遊園地ゾーンもあり、回転木馬や飛行塔、汽車などの遊具もある。これらの乗り物に乗るには、別途チケットを購入する。



【写真19】 パン職人がパンをつくっているようす



【写真20】 パン工房の外観

スカンセン入園の際は、大人は100クローネを支払うが、園内には別料金による体験的要素がある。これらは収益を上げるための重要な手段である。

また、広い園内には、客単価の設定がそれぞれ異なるいくつかのレストランがある。高級なものでは、スウェーデンの伝統的なビュッフェ形式である「スモーガスボード」を提供するレストランがあり、大人のランチ料金は300クローネ（約3600円）。またカフェテリア形式の気軽なレストランが園内各所にある。そして園内各所にある屋台では、ホットドッグやパンケーキ、サンドウィッチなどを気軽に食べることができる。

またスカンセンの名物として、もともとは、古い集合住宅だった建物を、スカンセンに移築したあとに、パン工房として使っている工房がある。ここでは伝統的な竈がしつらえられ、パン職人が毎日数種類のパンを焼いている。特に、スウェーデンの伝統的な「カネルブッレ」（シナモンロールパン）が人気であり、ストックホルム市内のパン屋の中でも、味が良いことで評判である。

また、展示されている建物の中では、庭で飼っているヤギの乳から、スウェーデンの伝統的なチーズを手作りし、見学者に食べさせることもある。

園内のステージでは、スウェーデンの伝統的な民族楽器によるコンサートや、現代の人気のアーティストを招いた音楽のコンサートも、同じように行われている。週末になると、老若男女を問わず多くの市民が、民族衣装を着てスカンセンに集まり、イベントに参加する。

このように見てみると、スカンセンでは「建物」「生き物」「乗り物」「食べ物」「鳴り物」（＝音楽）「着物」（＝民族衣装）のすべてが、「Frilufts museum」＝「野外博物館」を構成する重要な要素であることがわかる。

スウェーデンでは、「Frilufts museum」と呼ばれる施設は、いくつもあり、スウェーデンの国内の施設で連携して、「Frilufts museum」のあるべき姿、指針を示したガイドラインを策定している。建物と、それに付随する庭、植栽、動物を合わせて保護、保存して行くという方針は、すべての施設にあてはまる。

そして、それらはすべて、調査研究に裏付けられたものであり、博物館機能として調査研究を第一に考え取り組んでいるのである。スカンセン館長へのインタビューで繰り返し出てきたのは「スカンセンで提供するものは、ハイクオリティでなくてはならない。そしてスカンセンは本物を提供する場所である。」という言葉であった。スカンセンは、博物館の調査研究機能と、エンターテイメント性の両立で成り立っており、収益性、来館者数、どちらを見ても成功している博物館であると実感する。

ただ、スカンセンの120年の歴史を見ると、ずっとこのような歴史を持っているわけではなく、紆余曲折を経ているそうである。現在の館長は、経済に明るく、財界への人脈もあり、スカンセンの成功を導いていると、職員の多くは館長を賞賛している。

そして、スカンセンで働く職員は、スカンセンはすばらしい、夢のような博物館であると誇りを持って職務にあたっている。そしてスカンセンは、世界の「Open air museum」を先導する施設である、という強い自負を持っている。

不躾ながら「スカンセンはほかの博物館に比べると給料はどうですか。」と質問をしてみると、返ってきた答えは「もっと給料が良い仕事はほかにもたくさんあるが、こんなにやりがいのある仕事はない。」

「給料が高いわけではないが、労働条件はかなり良い」「なかなか辞める人がいないので、スカンセンに就職するのはかなり難しい」というものであった。

おわりに

5週間滞在すれば、スカンセンという博物館を隅々まで見ることができるのではないかと考えていたが、終わってみれば、5週間あってもまだまだスカンセンの全貌を理解するには至らなかった。特に、スウェーデンの建物は、寒い冬の中で生活していくために建てられているので、夏だけではなく、冬季を体験しないことには「Frilufts museum」としてのスカンセンを理解したとはいえないように思う。

また、スウェーデンと日本の社会構造の違いや、市民と博物館の関係性の違いを感じる機会も多かった。

特にうらやましく感じたことは、様々な業務を、スカンセンの職員が内部で担っていることであった。スカンセン財団の正職員には、学芸員と事務職員だけではなく、建築家、オルガニスト、照明プランナー、家具職人、パン職人、ガラス職人、ペンキ職人、衣服のデザイナー、植木職人、動物飼育員など、数え切れないくらい様々な職種の人がスペシャリストとして雇用されている。

スカンセンにおける調査研究機能と、エンターテイメント性の両立は、大いに参考としていきたい。

また、各セクションの方からは、参考にするべき文献の紹介を受けたので、それらの日本語化も視野に入れながら、今度も野外博物館研究を進めていきたい。

今回の研修によって得られたアイディアは、今後、江戸東京たてもの園での業務において実践していきたいと考えている。そして江戸東京たてもの園を、世界に誇る「Open air museum」に近づけるための努力をしていきたい。

※写真提供：スカンセン（野外博物館）